

マイケル・トンプソンの「素朴な行為論」

Michael Thompson's 'Naive Action Theory'

川瀬和也

本稿では、マイケル・トンプソンが *Life and Action* (2008) において展開した「素朴な行為論」について、その全体像を明らかにした上で、検討を加える。トンプソンの議論はその獨創性から高い評価を受けているが、他方でその獨創性ゆえに、現代の行為論にとってどのような意義を持つのか、正確な評価が進んでいないという状況がある。本稿では、彼の議論を整理し、フレーゲ的方法の当否、行為間の種類関係の扱い、行為説明における心的状態の役割という三つの観点から検討する。

キーワード：素朴な行為論、行為の哲学、意図的行為、行為説明、マイケル・トンプソン

目次

- I はじめに
- II 素朴な行為論
- III 検討
- IV 結論

I はじめに

マイケル・トンプソンは *Life and Action: Elementary Structures of Practice and Practical Thought* (2008) において、「素朴な行為論」という考え方を提示している¹。「素朴な行為論」は、多くの研究者の注目を集めているが、まだこれについてのまとまった研究は少ない。本稿では、この「素朴な行為論」という考え方について、これまでの研究を概観しながら検討する。

Life and Action は、自然誌的判断について論じた第1部、行為論を論じた第2部、そして実践について論じた第3部に分かれている。各部はアンスコムの影響下にあることや、後述するフレーゲ的方法を用いていることなどの共通点を持つものの、基本的には独立した議論となっている。これらのうち、最も影響力が大きいのは、「自然誌的判断」について論じた第1部の議論である。その原型となった論文は、フィリップ・フットの *Natural Goodness* (2001) において重要な役割を果たしたことで知られる。この議論は、日本でも村井 (2017) において紹介されている。

これに対して、「素朴な行為論」を論じた第2部は、研究論文の形で明確に批判・検討されることが少ない状況が続いてきた。ようやく2018年になって、トンプソンの行為論を論じた論文が複数収められた論文集が登場し、トンプソンの行為論の影響をある程度俯瞰できる状況が生まれつつある(Stout 2018)。

トンプソンの行為論について、日本では神崎繁による研究(神崎 2016)がある。しかし、この論文はアリストテレス主義の展開を追うという観点から、自然誌的判断を表現する「総称文」と、行為に関連してトンプソンが言及する「習慣文」の同型性を指摘するという少々トリッキーなものである。神崎の議論は、トンプソンの議論をさらに発展させたものであるかもしれないが、トンプソン自身は少なくとも明示的には総称文と習慣文の関係を論じてはいない。また、この論点は、行為説明において非完結相の行為文が現れるというトンプソンの強調点とも異なっている。もちろんこのこと自体は論文の欠陥ではないが、「素朴な行為論」の中心的な論点を正面から扱った研究とは言えない。

本稿では、このトンプソンの素朴な行為論について、全貌を明らかにした上で、検討を加えてゆく。本稿は以下の構成を取る。第II節では、トンプソンの素朴な行為論の全貌を明らかにする。その際、素朴な合理化と洗練された合理化とはそれぞれ何を指しているのか、トンプソンが用いるフレーゲ的方法とはどのような方法か、出来事・プロセス形式の思想はアспектを持つ、という主張がどう導かれるか、このことが素朴な行為論にとってどのような意義を持つか、といった観点に着目し、全体を整理する。第III節では、トンプソンの議論の意義や問題点を、フレーゲ的方法、行為の類種関係、心的状態の役割という三つの観点から検討する。

II 素朴な行為論

本節では、*Life and Action* 第2部の主題である「素朴な行為論」を整理する。

1 素朴な合理化と洗練された合理化

トンプソンは「素朴な行為説明」と、「洗練された行為説明」を対置する。これら二つの行為説明の対に関する議論から、彼の議論をたどりたい。

素朴な説明とは、「なぜAするのか？」の問いに対して、「Bしているからだ」と答えるような行為説明である。トンプソンは、「なぜそのコードを引っ張っているんだ？(Why are you pulling that cord?)」に「(私は)エンジンを起動しているんだ(I'm starting the engine)」と答える例など、会話形式の例を四つ挙げて次のように言う。

各々の応答において理由を定式化するものとして与えられているものには、何かを実際に為している者として、そしてさらには、目下の行為がその部分、段階、ないし「契機」だと言われなければならないようなことを為している者としての行為者の記述である、という特別な性格があ

る。このことが、我々の会話のそれぞれを、私が素朴な行為説明、あるいはより一般的に、素朴な合理化とこれから呼ぶものの事例として特徴付けている。(LA, 86)

具体例との対応を確認しながら整理しておこう。「理由を定式化するものとして与えられているもの」とは、コードの例では、「(私は) エンジンを起動している」である。これは確かに、「私」を、エンジンを起動している行為者として記述する表現である。また、「目下の行為」すなわちコードを引っ張ることは、エンジンを起動するという行為の部分や段階ないし契機と言える。

これに対して、洗練された説明とは、「なぜAしているんだ?」と聞かれて、「Bしたいからだ」と答えるような行為説明である。トンプソンによれば、この説明を好む哲学者の代表はデイヴィッドソンである。洗練された行為説明の例として、「なぜそのスイッチを上げたんだ? (Why are you flipping that switch?)」に「電気をつけたいんだ (I want to turn on the light)」と答えるような場合を考えよう。洗練された行為説明では、この例のように、欲求、ないし、トンプソンがより好む言い方では「欲すること」という心的状態が理由として挙げられる。

これは欲求の観点からの行為の説明、ないし、我々がより好む言い方では、欲することないし行為者が欲していることの観点からの行為の説明である。(LA, 87)

トンプソンは、これらに to 不定詞を用いた行為説明を加え、行為の合理化をする英語の文には以下の三つの形式があるとしている。

- ① I'm doing A because I'm doing B (素朴な合理化)
- ② I'm doing A because I want to do B (洗練された合理化)
- ③ I'm doing A in order to do B (目的化された句法)

これらのうち、③は①または②のいずれかを簡略化した表現だと考えられる。

行為説明の表現形式として目的化された句法以外のものを採用するとき、我々は二番目の行為動詞を、完全な文、真理である文にどのように適合させるかを決定しなければならない。我々は主語と動詞を直接、粘着なしで参入させようとするだろうか。例えば、卵を割る例で言えば、彼はオムレットを作っているのだ、というように。あるいは、間接的に、新たな動詞を書き入れて、彼はオムレットを作ろうと欲しているのだ、という言い方だけをするのだろうか。これは素朴と洗練の間の選択である。(LA, 88)

「彼はオムレットを作るために卵を割っているのだ」以外の表現で、「卵を割る」という彼の行

為の理由をどのように説明すべきか、とトンプソンは問うている。選択肢は二つある。一つ目は、「彼はオムレツを作っているので卵を割っている」とすることであり、二つ目は、「欲する」という動詞を加えて、「彼はオムレツを作ろうと欲しているので卵を割っている」とすることである。前者は素朴な行為説明であり、後者は洗練された行為説明である。

多くの哲学者は、素朴な行為説明は「何らかの洗練された形式においてより直接的ないしより適切に表現されるにちがいない」と考える (LA, 90)。

実際、〔ある種の議論では、〕我々の行為者は家を建てているのだが、それは彼がこれらのレンガを並べている理由ではない、本当はそうではない、ということになるのである。本来は、レンガ並べの根拠はむしろ、彼女は家を建てることを欲している、といったようなものであるにちがいないのである。このような考えは私が洗練された行為の哲学と呼ぶものの特徴なのだが、この思想では、すべての真正のストレートな合理化に、内から外、心から世界、精神から自然、「欲求」から「行為」への動きが見いだされる (LA, 90)。

このように考える根拠としては、欲求や信念のような行為者の心的状態こそが行為の真の理由である、という考え方を挙げることができるだろう (Davidson [1963] 2001)。最も適切な合理化は、行為の真の理由によってなされるべきであり、行為の真の理由は心的状態なのだから、最も適切な合理化は心的状態によってなされるべきだということになる。

トンプソンはこのような洗練された行為の哲学に反旗を翻し、素朴な行為論を擁護する。

私の主要なテーゼの一つはそれゆえ以下のようなものでなければならないだろう。洗練された立場は擁護されえず、言語的な外見は保存されるべきであり、一方の種類の立場において欲することが果たす役割は、他方の立場では、なされたことそのものの進行と我々が呼ぶものによって占められるのである。 (LA, 90)

洗練された行為論の論者は、「彼が卵を割っているのはオムレツを作っているからだ」は、「彼が卵を割っているのはオムレツを作ることを欲しているからだ」の省略形であり、正確を期すならば後者に書き換えられるべきだと主張する。これに対しトンプソンは、前者の「言語的な外見は保存されるべき」だとする。なぜなら、「なされたことそのものの進行」としての「オムレツを作っている」はそれ自体で行為の真正の理由であり、「オムレツを作ることを欲している」という真正の理由の省略表現ではないからである。

2 フレーゲ的方法

まだ「素朴な行為論」の概観は途中だが、ここでトンプソンが一貫して用いている方法論につ

いて論じておこう。これまで追ってきた議論だけを見ても、トンプソンが英語の細かな表現にこだわりながら議論を展開していることがわかるだろう。これには理由がある。

トンプソンが英語の細かな表現にこだわるのは、言語から思想へ、思想から存在者へという順序で探求を進めるという、「フレーゲ的」な方法のためである(LA, 13)。このフレーゲ的方法は、行為だけでなく、自然(第1部)や実践(第3部)について考察する際にも用いられる。これについて、詳しく見ておこう。

トンプソンは、*Life and Action* で扱われる生命、行為、実践の三つの領域は、ことがらではなく判断形式によって区別されるのだという。

判断の形式の概念は、論じられている素材を展開するにあたり、全体に広がっているものである。私が思うに、私が扱う三つの思想の領域を互いに分けているのは、正確にはその全体を覆う判断の形式(あるいは思想ないし述語付けの形式)の違いであり、第一には、各々の表題のもとで考えられていることがらにおける区別ではないのである。(LA, 13)

判断の形式は、議論の領域の区別だけでなく、概念の解明そのものの進行においても、探求の端緒となる。

私がテーマとする諸概念、すなわち生の形式、行為、実践等々の、思考されるさまざまなことがらを捉える諸概念の解明において最も重要なのは、それらの概念が、判断形式の関連する層と結びついていると明らかにすることである。(LA, 14)

このように、トンプソンは判断の形式と概念の結びつきを明らかにすることを、最も重要な仕事として自らに課している。

トンプソンによれば、我々の判断の形式は、我々が一般に保持している知的能力に対応している。

我々が考察してきているフレーゲ的な思想ないし判断の諸形式は、第一に我々が把握する思想の形式である。ここで言う思想とは、個人が思想を把握することとは独立の思想であって、それらのどれが真であるかについての誰かの実際の判断を大きく超えるものである。しかし我々はまた、それらが我々の各々が保持する基礎的な知的能力に対応するとも言ってよいだろう。(LA, 17)

敷衍しておこう。行為についての論文を書いている私は、いま行為のことを考えている。この意味で、私は行為についての「思想」を持っていると言える。しかし、ここで問題になっている思想はこのような意味での「思想」ではない。そもそも我々は行為について考えたり考えなかったりする知的能力を持っており、この意味で行為についての思想が存在する、という言い方ができる。この意味で

の思想こそ、トンプソンがここで問題にしているものである。これが判断の諸形式と対応しているというのが、トンプソンの考えである。

さらにトンプソンは、我々が思想の形式をきちんと把握していると言えるためには、我々は実際に何か客観的な真理に到達しうるのでなければならぬと付け加える。

私自身がこの知的能力の行使を通じて何が真であるかを登録することができるかと私が考えるのでなければ、私が私自身を知性の担い手、すなわち、思想の潜在的な把握者だとほとんど見なすことができないだろう。(LA, 17)

我々の知的能力は、我々が真理を認識することを可能にするようなものでなければならない。たしかに、我々にはときには誤ることもある。しかし、仮に思考能力を使っても真理に到達することが全く不可能なのだとすれば、その能力が知的能力だと言うことすらできなくなるだろう。それが知的能力である限り、少なくとも潜在的には、その能力は我々に真理の認識をもたらすようなものでなければならない。

もう一度全体を整理しながら、なぜ判断の形式を探求の端緒とするフレーゲ的方法が採用されるのか改めて考えてみよう。我々が行う判断の形式は、我々が行使する知的能力としての思想のありかたを反映しているものである。そして、我々が用いる知的能力は、真理の把握を可能にしているようなものである。そうだとすると、判断の形式に注目することで、我々が行使する知的能力としての思想がどのようなものであるかがわかり、さらに、その思想によって把握されうる真理がどのようなものであるのかも明らかになる。このような理路で、フレーゲ的方法が採用されることになるのだと思われる。

以上のような想定のもとで、トンプソンは行為論においては、我々が実際に行為の説明のために用いている文の形式を調べ、そこから世界の形而上学的な構造に迫ろうとする。このプロジェクトにおいて、行為の説明に行為文を用いるのか、それとも want のような欲求を表す文を用いるのかの違いが重要な意義を持つことになる。

3 「欲する」の判断形式

背景にある方法論がわかったところで、素朴な行為論に戻ろう。トンプソンはまず、洗練された行為説明に関わる、「欲する」を用いた判断の形式について分析している。

しばらくの間、前者の三つ組み〔試みる、欲する、意図する〕だけについて考えよう。これらは特別に心理的ないし心理学的な種類の説明項である。ここで我々が初めに思い至るのは、試み、意図、欲することの対象が、典型的には完全な命題の形式で定式化されていないということである〔…〕。もしあなたが、最も原初的な事例で、私に何を欲しているのかと

尋ねたなら、その答えは、味の無いものを飲み込むこと (to get the vanilla down)、とか、電気をつけること (to turn on the light)、といったものになるだろう。(LA, 120)

ここでのトンブソンの考えを敷衍しておこう。オムレツを作るために卵を割る例で考える。卵を割っているのはなぜかという問いに、「欲する」を用いて答えるとき、もしこの「欲する」という語が完全な命題の形式をもった名詞節を目的語に要求するのであれば、「私は、「私がオムレツを作るということ」を欲しているからだ (Because I want that I make an omelet)」と答えることになる。しかし実際には、このような答え方ではなく、「オムレツを作ることを欲しているからだ (Because I want to make an omelet)」と答える方が自然である。このとき、「オムレツを作ること (to make an omelet)」が完全な命題の形式を持ってはいないということに注目するようトンブソンは促している。

さらにトンブソンは、試みる、意図する、欲するという三つ組みの心理的動詞は、目的語として上で見た不定詞句や that 節のほかに、単純な名詞を取ることもできると指摘する。例えば、「私はオムレツを欲する」と言うことができる。

このように、さしあたり言語に関する事実として、「欲する」のような語の目的語が、「カテゴリー的な多様性」を有しているということが指摘できる。トンブソンのフレーゲ的方法において、このことは重要である。

表層において「目的語」の際だったカテゴリー的な多様性が可能であるとすると、フレーゲ的な懸念により、我々は以下の選択を迫られることになる。すなわち、カテゴリーに関して見かけ上無差別的である心理学的な動詞はいずれも、これら数種の場合を通じて本当は一義的ではないとするか、それとも、これらの補語の中に、実際に言葉が発せられるときには体系的に不十分な仕方では表現されるものが含まれているとするか、いずれかを選択せねばならない。(LA, 121)

表層文法において様々なカテゴリーの目的語を取る心理的動詞を含む判断の本来の形式をフレーゲに倣って探求すると、wantが多義的であるか、あるいはwantの目的語が本来と異なる形式で表現されているかのいずれかだと考えねばならなくなる。トンブソンの診断は後者である。

トンブソンによれば、wantの本来の目的語は動詞句(e. g. walk to school; make an omelet)である。これらの動詞句は、出来事やプロセスの形式を示す表現である。このような出来事-プロセス形式の表現は、性質や状態を示す表現(e. g. is taller than Henry; is red; believes in God)に対置される。

出来事やプロセスの形式を表す言語表現の特徴は、テンス(時制)に加えて、完結および非完結のアスペクト(相)を持つことである²。これに対して、性質や状態を表す表現は、テンスは持つがアスペクトを持たない。

アスペクトの違いは、過去時制の表現で見られる。英語においては、完結アスペクトは完了形や単純過去形(I have walked to school; I walked to school)によって表現される一方、非完結アス

ペクトは過去進行形 (I was walking to school) によって表現される。これに対して、現在時制では、非完結相にあたる進行形はあるが、完結相にあたる表現はない。現在形の “I walk to school” という表現は、習慣的行為を表す表現であり、完結の aspekto を表す表現ではない。

現代の行為論ではこれらの相の違いは無視されているが、実際はこれらは異なる判断形式を持っており、それゆえトンプソンにしたがえば、異なった思想を表現している。例えば、非完結相の表現である「私は学校に向かって歩いていた」が、完結相の表現である「私は学校へと歩き終えた」を含蓄しないことは明らかである。これは両者が異なる思想を表現することの証拠である³。

以上の考察により、want のような表現の目的語となる表現を「命題的態度」としてひとまとめにすることの問題点が分かる。

ことがらが持つこの特徴がひとたび反省的に把握されたならば、「命題的態度」という観念を実践哲学の領域において我々が関心を持っている心の状態に機械的に適用することの困難が少しわかりやすくなる。すなわち、[そうした心の状態として] 典型的な試み、意図、欲することの目的語がなぜ命題という形での定式化を拒むことになるのかを見て取ることが容易になる。私が意図的に学校へと歩いているとしよう。このとき、これまでの想定からすると、私が学校への歩行を欲すること [歩きたいということ] (that I want to walk to school) が帰結する。例えばそれが、私がこの一步を踏み出す理由なのである。命題という形に構成し直す場合、この「欲する」の目的語は何になるだろうか。きっと、「私が学校へ歩くということ (that I walk to school)」のようになるだろう。そして、そこらじゅうにある「私はpということを欲する (I want that p)」の内の空欄を哲学者たちがなんとかして埋めようとするとき、我々はまさにこの種の置換を避けがたく見いだす、ということになる。問題はむしろ、求められる命題が存在しないということである。我々がここで、とらえがたい思想内容に到達しようとして用いる英語の断片は、実際には習慣的な意味を表現しているのであって、それは我々が思い描いていたものとは全く異なるものなのである。(LA, 127-128)

wantの目的語として現れるto不定詞を接続詞thatを用いて命題の形に直すと、習慣的な行為を表す現在時制の表現になってしまう。たとえば、“I want to walk to school” を接続詞thatを用いて命題の形にすると、“I want that I walk to school” となるが、“I walk to school” という命題は本来、私が習慣的に学校へと歩いて行っている、ということの意味する。しかし実際には、wantの目的語は、aspecttoを持つような出来事-プロセス形式を持っているはずである。トンプソンが挙げている実際に学校に歩いているときに歩きたいとも思っているという例で考えれば、ここでの補語は「私が今学校へと歩いている」ということでなければならない。他の例で考えても、「オムレツを作りたい」という表現が「習慣的にオムレツを作ることを欲する」を意味していないことは明らかである。

wantのような心理的動詞の本来の目的語が表現すべきなのは、非完結aspecttoのことがらであ

る。to不定詞は、これを表現するために用いられている。これがトンブソンの診断である。

4 素朴な行為説明とアスペクト

これまでに明らかになったのは、wantのような洗練された行為説明に現れる心理動詞の目的語が完結相／非完結相の区別を持つような出来事・プロセス形式を持つということであった。このアスペクトに関する論点が、素朴な行為説明と洗練された行為説明の関係について考える際の前提となる。

アスペクトの違いが持つ意義を明確にするため、過去時制における素朴な行為説明について考えよう。トンブソンは次のように言う。

我々の素朴な合理化、すなわち、説明項が私がこれまで行為の「ありのままの」表現と呼んできたものによって与えられるような合理化においては、過去であれ現在であれ、進行形が唯一の許容される形式である。我々はもちろん「私がAすることを欲したのは私がBしていたからだ (I wanted to A because I was doing B)」とすることができる。しかし、何か別の種類の説明へと移行しないかぎり、「私がAすることを欲したのは私がBした(ないし、Bしてしまった)からだ (I wanted to A because I did (or I have done) B)」とは言えない。(LA, 129)

素朴な合理化の実例を観察すると、説明項に現れる動詞は常に非完結相であるということがわかる。「卵を割ったのはオムレットを作ったからだ」ではなく、「卵を割ったのはオムレットを作っていたからだ」と言わなければならないのである。

洗練された行為説明においては、心理動詞を用いた表現(e.g.「欲する」)が説明項に現れる。これらの表現はなぜ説明項に出現するのだろうか。これらの心理動詞が、非完結相を表現する機能を担っているからだ、というのがトンブソンの考えである。

たったいま到達された定式化からは、以下の仮説が導かれる。このような実践的かつ心理的な動詞の機能は正確には、ある種の非完結的判断の形式を表現することなのである。たとえば、マーサは道路を渡ろうと欲していた、あるいは意図していた、試みていたと判断するとき、我々はマーサの表象と、道路を渡ることの一般的な理解とをつなぎ合わせているのである。(LA, 131)

ここでもオムレットの例で考えよう。「ピエールはオムレットを作ることを欲していた」は、「ピエールは卵を割った」を合理化することができる。この判断において何が表現されているのだろうか。トンブソンの考えにしがえば、以下のものが挙げられることになるだろう。

1. 行為主体であるピエールの表象
2. オムレットを作ることの表象

3. オムレツを作ることが一般に出来事・プロセス形式を持つということ
4. オムレツを作ることが非完結のAspectを持つこと
5. ピエールがオムレツを作ることに對して、「欲する」という關係に立つこと

通常我々は「欲する」の機能を5に限定して理解している。しかしトンプソンは、3や4を示す機能も、「欲する」が担っていると言うのである。

これを、通常の現在進行形である *is ...ing* を用いた表現と比較してみよう。*is ...ing* という英語の表現は、前段落の箇条書きにおける3と4を表現するという、*want* と共通の機能を持っている。*want* を使うと、これに5が追加される。

このような理解は、*is ...ing* よりも *want* を用いた表現の方がより正確である、という考えとは大きく異なっている。トンプソンによれば、いずれの表現も等しく、非完結のAspectを表現するという機能を担っている。そのことのゆえに、説明項にあたる全体としての行為を表現するために用いられることが可能となっている。

以上の議論によって、非完結相を表す表現として、素朴な合理化で用いられる現在進行形が、洗練された合理化で用いられる心理動詞を用いた表現に劣るものではない、ということが示された。素朴な合理化と洗練された合理化は、この意味ではいわば対等な關係にある。

このことをより明示的にするために、トンプソンは素朴な合理化だけを行う「素朴な行為者」を想定し、彼らに何ができるかを考察してみる、という戦略をとる。

我々の素朴な行為者が操作できる対立項の本質的な特徴は以下のものである。(a) 紛れもない完結的形式すなわち「私はAした(I did A)」は、素朴な行為者が用いるときと我々が用いるときで全く同じ領域に用いられる。(b) 彼らが用いる“*is ...ing*” (あるいは“*is IMP* [非完結(imperfective)を明示化するためにトンプソンが導入する人工的な表現] *to*”) は、我々の“*is ...ing*”と同様に、合理化の文脈の内外両方に適用される。また、意図的行為だけでなく、葉や惑星の動きを記述するためにも用いられる。(c) 合理化の文脈の外でのその表現の使用は、本質的には、我々のものと同じである。(LA, 139)

実に*is ...ing*さえあれば、以上の三つの場合をすべて区別することができるのである。これだけのことができれば、完結相と非完結相を持つ出来事ないしプロセスの形式を把握するには十分だとトンプソンは言う(LA, 139)。我々と素朴な行為者たちの違いは、素朴な行為者が非完結的な様態における出来事プロセス形式の現前を直接的かつ抽象的にのみ扱うのに対し、我々はさまざまな形式(つまり*want, intend, is trying*など)で扱えるという点にある。

心理動詞を用いた表現が洗練されているのは、より複雑な事態を表現できるからであって、同じ事態をより正確に記述できるからではない、というのがトンプソンの結論である。洗練された合理

化と素朴な合理化の関係は、信用の概念を用いたフォン・ミーゼスによる商行為の分析と、物々交換の概念のみを用いたアリストテレスの商行為の分析との関係と類比的だとトンプソンは言う。単なる物々交換を信用の概念を用いて記述し直したからと言って、それをより正確に記述したことにはならない。同様に、現在進行形を用いた素朴な合理化を、心理動詞を用いた洗練された合理化で言い換えたからといって、それをより正確に記述したことにはならないのである(LA, 146)。

5. 「素朴な行為論」まとめ

以上がトンプソンの議論の全貌である。改めてまとめておこう。トンプソンによれば、行為を含む出来事やプロセスの形式を持つ存在者には、アスペクトを持つという際だった特徴がある。素朴な行為説明とアスペクトの関係を考えると、非完結のアスペクトで表現された出来事またはプロセスのみが説明項に現れる、という重要な特徴がある。心理動詞を用いた、洗練された行為説明は、非完結相の出来事-プロセス形式を導入するためのより複雑な表現として理解できる。このような理解のもとでは、洗練された行為説明が事態のより正確な記述だということではなく、素朴な行為説明も洗練された行為説明も、それぞれ異なったニュアンスを持つ行為の理由を正確に記述するものだけということになる。

III 検討

本節では、前節で整理したトンプソンの議論に、フレーゲ的方法の厳密な含意、類種関係を利用した行為説明、行為の理由と心的状態の関係の三つの側面から検討を加えたい。

1 フレーゲ的方法と観念論

トンプソンの言うフレーゲ的方法は、言語表現の形式の分析から始めて、我々の知的能力や、その能力によって把握されるべき存在者の形式へと探求を進めようとするものである。この戦略は、一見したところ、言語と知的能力、そして存在者の関係に関するかなり強いコミットメントを伴っているように思われる。

日常言語における判断の形式がア・プリオリに定まるとトンプソンが考えているのだとすれば、トンプソンの立場は判断形式が我々の経験能力と不可分に対応していることに着目するカント主義に接近することになる。しかしこの場合、トンプソンの立場は、カント的な超越論的観念論、ないし反実在論的な立場を持つ困難を、先鋭化された形で抱え込むことになる(cf. 村井 2017)。

私が懸念するのは、表層文法におけるどのような違いを判断形式の違いと考えるべきかを決定することは不可能なのではないか、ということである。確かに過去進行形と単純過去形は異なる判断形式と言えるかもしれない。しかし、表層文法における他の際だった特徴、例えば三人称単

数現在形の動詞の形は、他の現在形とは異なる判断形式を反映しているのだろうか。それとも、していないのだろうか。表層文法の特徴すべてについて、これをア・プリオリに決定することは不可能ではないだろうか。

この問題点を回避するには、より穏当な仕方では、フレーゲ的方法を理解すべきだろう。例えばアスペクトやテンスのような概念は、言語学において、比較的素朴な形而上学的直観にしたがって言語表現を分類するための仮説のようなものであって、それをを用いることの正当性は、言語学における実証的な研究によって保証されている、と捉えることもできる。フレーゲ的な方法が判断の形式に関するこのような理解と両立するならば、判断の形式にどのようなものが数えられるかは、言語学によって明確化されうるということになる。このとき、判断形式や経験能力から存在論を基礎づける観念論的な見解へのコミットメントと、フレーゲ的方法は無縁である。そうではなく、言語学の成果を存在論的な研究に応用することを可能にする、言語と存在の間の形而上学的な先後関係については中立的な探求の方法論がフレーゲ的方法だということになるだろう。

2 行為説明と種類関係

トンプソンは、非完結相で表現される全体としての行為によって、行為の途中の段階が説明される (e. g. 「オムレツを作っていたから、卵を割った」) のが、素朴な行為説明だと論じていた。これに対して、部分全体関係だけでは素朴な行為説明の全体は尽くされないとする指摘がある (Ford 2018)。これを詳しく検討しよう。

現在進行形を用いた素朴な行為説明には、類にあたる行為を述べることで、種にあたる行為を説明するものがある。例えば、「なぜオムレツを作ったのか？」という問いに、「朝食を作っていたのだ」と答える場合がありうる。例を単純化して、この日の朝食はオムレツのみだったとしよう。このとき、「オムレツを作る」ことは、「朝食を作る」ことそのものであり、途中の段階ではない。したがってここでは、全体的な行為によって部分的な行為が説明されているわけではない。むしろここでは、「朝食を作る」という「類」にあたる行為によって、「オムレツを作る」という「種」にあたる行為が説明されている (Ford 2018, 171-2)。これは、「によって」関係をめぐって展開された行為論と出来事存在論にまたがる古典的な議論に連なる論点であろう (cf. 柏端 1997, 19-26)。

この指摘は些細なものに思えるかもしれないが、トンプソンの議論にとって深刻な打撃となりうる。トンプソンは、行為説明において、説明項には常に非完結相の行為記述が現れるということを指摘していた。説明項にあたる行為と被説明項にあたる行為が全体と部分の関係に立っている場合には、部分である行為が行われている段階では全体としての行為は完結していないから、非完結相で表現されるのが自然だと言えた。しかし、種類関係の場合にはそうはいかない。それにもかかわらず、この場合にも、説明項にあたる行為は非完結相で表現されるのが、少なくとも言語表現としては自然である。例えば、「なぜオムレツを作ったのか？」と聞かれたときに、「朝食を作ったからだ」と答えるのは奇妙であろう。この場合でも、我々は、「朝食を作っていたのだ」と答えるのである。朝食を

作るという行為とオムレツを作るという行為は同時に完結するはずなのに、なぜこの場合にも非完結相の表現が好まれるのだろうか。トンブソンの理論は、これを説明できないのではないだろうか。

この反論をかわすためにも、フレーゲ的方法は観念論的なコミットメントを伴うものではなく、探求の一つの方法論にすぎない、と考えるべきだと私には思われる。フレーゲ的方法は、非完結のアスペクトを持つような出来事-プロセス形式を持つ存在者があるということを発見するためには有効であった。しかし、我々はこれとは別の方法によって、出来事やプロセスについて、それらが相互に種類関係に立ちうるという、アスペクトとは無関係な形而上学的な特徴をも見いだすことができる。フレーゲ的方法は、判断の形式とは独立したこのような形而上学的探求とも矛盾しないものでなければならぬだろう。

こう考えれば、トンブソンの分析の成果を保存したまま、種類関係による説明を取り込むことが可能になる。種類関係の場合に、説明項の行為が非完結相で表現されるのは、全体部分関係の場合の表現が転用されたからに過ぎない。非完結的アスペクトという判断の形式にこだわって、種類関係の場合においてもアスペクトが重要な役割を果たしているのだと強弁するよりも、こう考えるほうが穏当だと私には思われる。

3. 心的状態の位置づけ

素朴な行為論によって導かれる議論の中で、現代の行為論にとって最も重要だと思われるのは、行為の説明において心的状態は特権的な役割を持たない、という主張である。トンブソンは、心的状態に言及する洗練された行為説明が、素朴な行為説明より正確なわけではないと主張する。したがって、素朴な行為説明が成立しているときには、心的状態は行為説明の中に役割を持たないということになるのである。

行為の理由は心的状態に限定されるべきか否か、という問題は、近年の行為論における主要な論争点の一つであった。この論争において「台風の目」となってきたのは、行為の理由は心的状態ではなく、行為に先立つ事態であるとする J. ダンシーの議論である (Dancy 2000; 鈴木 2016)。トンブソンにおいては、素朴な行為説明の場合には、行為の理由は先立つ事態でも心理状態でもなく、その行為を部分として含むような、非完結的な行為全体であるとされる。したがってトンブソンは、ダンシーとは全く異なる観点から、行為の理由と心的状態の結びつきを切り崩していると言える。

トンブソンは、行為の説明が可能であるために、自分が何をしようとしているかを行為者が正確に把握していることは必要ではないと主張している。トンブソンの言葉を用いれば、彼の考えは、「もしある行為が与えられた記述のもとで意図的であるならば、まさにこの記述、ないしそれによって表現されている概念は、行為者が実際に生じている思想において保有しているようなものでなければならない」という考えと対立する (LA, 108)。行為の理由を説明できるか否かと、被説明項となる行為や、説明項となる行為を実際に意識しているか否かは関係がない。例えば私が、 α から ω まで岩を押して動かそうとしているとする。これは意図的行為である。ここで、 α と ω までの動線の上に地点 β をとる。

すると、私は、 α から β まで岩を意図的に押しているとも言える。ここで、 β と α の間の距離を無限に近づけてゆくと、私が α から β まで石を動かしていると明示的に意識することはやがて不可能となるだろう。それでもなお、 α から β まで石を動かすという行為は意図的であり、これが意図的であるために「 α から β まで石を押すことを意図する」のような心的状態は不要だとトンプソンは言う (LA, 108-109)。

意図やそれに類する心的状態を全く伴わない行為が意図的行為であると述べることはあまりに用語上の混乱を招きやすいため、私はここで用語上の混乱を避けつつトンプソンの議論のポイントを救うため、このような行為を「意図的行為」ではなく「理にかなった行為」と呼ぶことを提案したい。意図に類する心の状態が伴わなかったとしても、行為は理にかなったものとなりうる。このように用語法を変更しても、トンプソンの議論の中核となる論点は損なわれないはずである。では、この主張は受け入れられうるだろうか。

意図的行為を理にかなった行為と言い換えたとしても、意図に類する心的状態を欠く理にかなった行為が存在するという主張や、無限小にまで「理にかなった行為」を分割できるという主張は、著しく直観に反すると思われるかもしれない。一つの争点は、実践的推論である。意図的行為を導くような目的から手段への実践的推論において、行為者は手段として何をすべきかを知っているはずである。そして、このような推論によって導かれていることによって、行為は理にかなったものとなる。したがって、実践的推論に現れうる行為の最小単位が存在する。トンプソンに対抗してこのように論じることは可能だろう (Hornsby 2013)。「思想(「生じている思想」ではない)が行為に浸透していると想定するのは間違っているのだろうか？」(Hornsby 2013, 15)。ホーンズビーのこの問いかけに肯定で答えるか否定で答えるかは、トンプソンの議論を否定するか肯定するか直結している。

IV 結論

本稿では、トンプソンの「素朴な行為論」を整理し、それに検討を加えた。とりわけ重要な論点は、フレゲ的方法の位置づけと、行為説明における心的状態の特権的な役割の剥奪の二つであろう。前者は素朴な行為論だけでなく、トンプソンの議論全体の成否に関わる論点である。後者は、とりわけ現代行為論の文脈の中にトンプソンの議論を位置づけるにあたって、影響力を持ちうる論点である。これらの論点についての議論を精緻化させることが、トンプソンから我々に課された課題だと言えるだろう。

引用文献

LA: Thompson, Michael. 2008. *Life and Action: Elementary Structures of Practice and*

Practical Thought, Harvard University Press.

Dancy, Jonathan. 2000. *Practical Reality*, Oxford University Press.

Davidson, Donald. (1963) 2001. “Actions, Reasons, and Causes,” in: *Essays on Actions and Events*, Donald Davidson, 2nd Edition, Oxford University Press.

Foot, Philippa. 2001. *Natural Goodness*, Oxford University Press.

Ford, Anton. 2018. “The Progress of the Deed,” in Stout (2018), Ch. 8, pp. 168-184.

Hornsby, Jennifer. 2013. “Basic Activity,” *Proceedings of the Aristotelian Society Supplementary Volume*, 87, Issue 1, pp. 1-18.

神崎繁. 2016. 「アリストテレス的自然主義の新展開——「自然誌的判断」と「行為の性向」の論理形式——」、『理想』第696号、理想社、62-76頁。

柏端達也. 1997. 『行為と出来事存在論——デイヴィッドソンの視点から』、勁草書房。

村井忠康. 2017. 「生と論理——分析的ヘーゲル主義としてのトンブソンの生命論」、『現代思想』、vol. 45-21、青土社、207-221頁。

Stout, Rowland(ed.). 2018. *Process, Action, and Experience*, Oxford University Press.

鈴木雄大. 2016. 「理由の反心理主義に基づいて行為の反因果説を擁護する」、『科学哲学』、第49巻第1号、日本科学哲学会、1-17頁。

¹ 本稿は、葛谷潤、長門裕介、鴻浩介の三氏との読書会の成果に多くを負っている。

² アスペクトの「完結」「非完結」が、文の形である「完了」「未完了」と区別されることに注意。また、以下では、「テンス」と「時制」、「アスペクト」と「相」はそれぞれ、相互に交換可能な仕方を用いる。

³ 日本語の「歩いた」はいずれのアスペクトとも取れる多義的な表現だが、これは「た」が多義的であることを意味しているだけであり、日本語にアスペクトが存在しないことを意味するわけではない。日本語でも二つのアスペクトを区別することは可能である。

